

## 漢代五言詩歌と死語の世界

柳川, 順子  
県立広島大学 : 准教授 : 中国古典文学

<https://doi.org/10.15017/13182>

---

出版情報 : 中国文学論集. 36, pp.1-15, 2007-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 漢代五言詩歌と死後の世界

柳川 順子

漢代の五言詩には、死後の世界に言及するものが少なくない。たとえば、『文選』巻二十九「古詩」十九首（其十三）の主人公は、詩の冒頭、車を駆って洛陽の上東門を出ると、北のかた遙かに白楊や松柏に鬱蒼と取り囲まれた陵墓を眺めやる。なぜ唐突にも墓なのか。この「驅車東門」詩は、人生のはかなさを見つめた上で、それを転換点として享樂的人生の謳歌へと大きく傾いてゆくので、その初めに陵墓の遠景を詠じるのは表現上の必然であったとはたしかに言える。それでは、同じ十九首の其三「青青陵上柏」詩はどうだろう。最初に青青と繁茂する陵墓の上の柏を提示しながら、本詩はその後、このモチーフを更に展開させることは特にない。この詩が詠するのは、あくまでも「宴を極めて心意を娛しましめん」という世俗的願望である。このような詩が、その冒頭にある種の表徴のごとく陵上の柏を示すのはなぜだろうか。

現世は、死というものに縁取られていればこそ、その輝きを増すということは真実だ。その意味では、享樂的な人生観が死後の世界と隣りあわせて詠じられるのは文学的必然であったと言える。また、葬礼や祭祀に歌を伴うのは、古今東西に共通する人類に普遍的な営みだとも言つてよいだろう。だが、本稿で問題にしよつとしているのは、五言という漢代においては頗る特殊であった詩型と、死者を祭るということとの具体的な関係である。なぜ、五言の詩歌に死の影が差すのだろうか。ことはそれほど自明のことではないように思われる。

というのは、漢代五言古詩の中には、一方で男女の離別の情を主題とする詩篇がかなりのポリュームをもって存在し、それらは素直に読む限り、直接的には死後の世界には言及しないからである。たとえば次に挙げる「古詩」

十九首(其二)を例として見てみよう。

青青河畔草 鬱鬱園中柳 青青たる河畔の草、鬱鬱たる園中の柳。

盈盈樓上女 皎皎當牕牖 盈盈たる樓上の女、皎皎として牕牖に當たる。

娥娥紅粉粧 織織出素手 娥娥たる紅粉の粧、織織として素手を出だす。

昔爲倡家女 今爲蕩子婦 昔は倡家の女爲り、今は蕩子の婦爲り。

蕩子行不歸 空牀難獨守 蕩子 行きて歸らず、空牀 獨り守ること難し。

孤閨を守る女性の寂しさを詠じたこの詩は、その二句目に「青青河畔草」と見え、これは先に示した「青青陵上柏」詩の冒頭に酷似している。表現がこれほどまでに一致している以上、両者は強いつながりを持っていると考えられるが、この「青青河畔草」詩が詠ずるのは、極めて世俗的な男女の離別の情である。同類の措辞を共有する「古詩」が、一方で現世的な男女の愛情を歌い、一方で死後の世界に触れる。これはどういうことなのだろうか。

この問題について、松家裕子氏は次のような仮説を立てておられる。すなわち、五言古詩は死者儀礼にかかわる歌謡の一つの源流として成立したものであり、五言古詩においてこの世に生きる男女の愛情と見えるものは、その源流となった歌謡では死者に対して訴えかけるものだったのではないかと。この論考は、特にその推論の過程が非常に示唆に富むものであつて、後ほど示す私の試論も、松家論文に一致する部分を一部に持つ。ただ、少なくとも陵墓に直接言及する詩篇の成立経緯について言えば、それらは五言古詩の生成に死者儀礼というものが関与した結果生まれたものではなく、もともと現世的な戯れ歌として誕生した五言詩歌が、その後の展開の途上、死者の住む世界と行き逢つた結果の産物ではないかと私は考える。本稿は、この見通しの根拠を示そうとするものである。

—

漢代五言詩の代表的作品群「古詩」は、梁の鍾嶸『詩品』上品(古詩)によると、六朝当時において五十九首が伝存していたらしいが、これらの諸篇は、ある程度の客観性をもつて幾つかのグループに分類することが可能であ

る。このことについては既に試論を示したことがあるのだが、本稿での論述の都合上、今ここに改めてその概要を示しておきたい。

まず、「古詩」数十篇は、古采別格視されてきたある特別な一群と、その他の諸篇とに分けることができる。この特別な一群は、西晋の陸機がそれをまるごと「擬古詩」の模擬対象としたこと、「詩品」がその陸機の模擬対象となつた一群を周知の既成事実として特別視していること、「詩品」と同じく梁代に成つた「玉台新詠」が、この一群に属する諸篇を他の「古詩」とは区別し、枚乗「雜詩」として収録していることなどにより、その境界線の輪郭が今に伝わっている。そして、この一群は、その他の諸篇よりも比較的古い時代に成つた、ある種の古典的価値を付与された作品群であり、その詩群としての成立は、後漢時代初頭、洛陽の王侯貴顕たちが主催する宴席においてではなかつたかと私は推測する。この格別な一群を、便宜上、第一古詩群と名づけよう。

この第一古詩群は、更にその内容から見て、宴席に言及するものと、そうでないものとに分類することができる。前者は、「人生」の「忽」たることを言つ特徴的な措辞を共有し、また、何らかの形で洛陽に言及する詩は全てこの部類に属する。「今日良宴会」「青青陵上柏」「驅車上東門」がそれである。一方、宴席に言及しない諸篇は、慕わしい人との離別という、漢代の宴席を彩る歌曲には頻見するテーマを多く詠じている。また、その句数は八句か十句、もしくはそれを二度重ねた十六句か二十句であり、このことは、「古詩」の原初的な形態が、ある一定の時間的拘束を受ける音楽と深く結びついていたのであつたことを示唆している。なお、宴席に言及する諸篇の方は、こつした縛りを必ずしも受けてはいない。以上のようなことから推測するに、宴席に言及しない諸篇は、それに言及する諸篇に先行して、宴の場に悲哀の情感を提供する文芸として行われていたのではないかと考えられる。更に絞り込めば、宴席に言及しない諸篇の中でも、八句か十句から成るものは比較的古層に属すると見ることができだろつ。すなわち、「蘭若生春陽」「涉江采芙蓉」「庭中有奇樹」「迢迢牽牛星」「青青河畔草」「明月何皎皎」の六首がそれである。そして、これらの詩は、その内容や表現的特徴から判断して、前漢の後宮周辺で誕生した可能性が最も高い。そもそも五言歌謡は楚国の民謡に発祥するものであつて、楚の文化が関中に流れ込んだ前漢初め、それはまず宮廷の女性や佞幸の樂人たちの間で流行したよつである。このことは岡村繁氏の先駆的研究が夙に指し示

ているところだが、今ここに要約して再提示した私論は、氏のこの画期的推論に導かれつつ、その後を受けて、新たに「古詩」の中から最も原初的な諸篇を取り出し、それらの成立が、前漢時代、宮中の女性たちの間においてではなかったかという推測に至ったものである。

さて、漢代の「古詩」数十篇を、その成立段階に沿って以上のように分類することももし妥当だとするならば、ここに興味深い事実が浮かび上がる。すなわち、「古詩」の中でも比較的古い時期に成立したと推定される諸篇には死の影をほとんど認めることができない一方、死後の世界への言及は、比較的遅れて成ったと見られる詩篇に集中して現れるのである。たとえば、先ほど例示した「青青河畔草」は、第一古詩群の中でも最古層に属するものの一つと見たのであつたが、この詩は流浪する夫の帰りを待ちわびる女性の満たされぬ思いを詠するばかりであつて、辞句を素直に追う限り、その言葉の背後に死者に呼びかける声を聴き取ることが難しい。牽牛織女の悲恋を詠する「迢迢牽牛星」、草木を手折つて遠方にいる慕わしい人に送り届けたいと歌う「涉江采芙蓉」「庭中有奇樹」、月明かりに照らされて帰らぬ人を想う「明月何皎皎」、いずれも同様である。ただ「蘭若生春陽」のみは、神と人との交感を歌う『楚辞』九歌に近い雰囲気を持っており、あの世とのつながりを強く感じさせはするのだが、しかしこの詩でさえ、少なくとも直接的に死というものに触れることはない。他方、前章でも触れた、陵墓を眺めて人生の有限性に思い至る「驅車上東門」、墳墓に生い茂る柏から歌い起こす宴の詩「青青陵上柏」は、いずれも第一古詩群の中でも比較的新しい部類に属すると推定した詩篇である。この他、荒れ果てた墳墓の様子を描写する「去者日以疎」は第一古詩群に属さない詩であつて、その描写内容から見ても、恐らくは第一古詩群の成立よりも更に降つた後漢中期以降の所産ではないかと推察される。

以上を要するに、「古詩」における死への言及は、比較的遅い時期に成立したと思われる詩篇に集中して認められ、より原初的な詩篇においては却つてそれが希薄である。このことを踏まえると、「古詩」と死後の世界との交錯は、漢代五言詩史上、思ひのほか新しい段階での出来事であつたと言わねばならない。それでは、両者はいつ頃、どのような経緯で出違ったのだろうか。

前章で述べたとおり、「古詩」はその初め、前漢の後宮周辺で誕生したと私は考えているが、もしこの推測が当たっているならば、「古詩」が死後の世界と出逢ったのは、成り行き上極めて自然なことであったと言える。というのは、前漢の半ば以降、皇帝が崩御すると、後宮の女性たちはその皇帝の葬られた園陵に仕えるようになったからである。こうした慣習が成立し、定着していったことを示す資料として、たとえば『漢書』卷七十二・貢禹伝に次のような記事が見える。貢禹は、元帝（在位前四九 前三三）に諫大夫として召された人物で、当世の弛緩した経済状況を引き締めるべく節儉を勧める諫言を奏上したが、その中で彼は、時代の空気が次第に奢侈に傾いてきていることを過去に遡って指摘し、特に、武帝期（前一四一 前八七）以降の情況について次のように述べている。

武帝の時、又た多く好女を取ること數千人に至り、以て後宮を填たす。天下を棄つるに及びて、昭帝 幼弱なれば、霍光 事を専らにし、禮正を知らず、妄りに多く金錢財物を滅し、鳥獸魚鼈牛馬虎豹生禽、凡そ百九十物、盡く之を糜滅し、又た皆後宮の女を以て園陵に置くは、大いに禮を失し、天心に逆らひ、又た未だ必ずしも武帝の意に稱はざるなり。昭帝の晏駕するに、光は復た之を行なふ。孝宣皇帝の時に至りて、陛下は言ふ所有るを惡み、群臣も亦た故事に隨ふは、甚だ痛む可きなり。故に天下をして化を承けしめ、女を取ること皆大いに度を過ぎ、諸侯の妻妾或いは數百人に至り、豪富吏民の歌者を畜ふるは數十人に至る。是を以て内には怨女多く、外には曠夫多し。衆庶の葬埋に及びては、皆地上を虚しくして以て地下を實たす。

これによると、武帝は後宮に多くの女性たちを集めたが、その没後、外戚の霍光によって、多くの財宝や動物が陵墓の中に埋められるとともに、後宮の女性たちは園陵に配せられ、以降、同様のことが昭帝、宣帝の崩御に際しても繰り返されたようである。そして、王朝のこうした奢侈な気風が民間に波及して、貴顕富豪たちにおける妻妾や女樂の囲い込み、庶民たちにおける度を越す厚葬といった悪しき風潮が醸成されることになったのだと貢禹は言っている。こうした風潮を正すべく、彼はまた元帝に向けて次のような進言も行っている。

陛下 誠深く高祖の苦を念ひ、醇く太宗（文帝）の治に法り、己を正して以て下に先んじ、賢を選びて以て自らを輔せしめ、忠正を開進し、誅を姦臣に致し、遠く調佞を放ち、園陵の女を放出し、倡樂を罷め、鄭聲を絶ち、甲乙の帳を去り、僞薄の物を退け、節儉の化を修め、天下の民を驅りて皆農に歸せしめ、此くの如くして解らずんば、則ち三王にも侔しかる可く、五帝にも及ぶ可し。

このように、園陵に仕える女性たちの解放が、俗樂の廃止などといった奢侈を諫める文脈の中で主張されている。だが、貢禹の懇切なる諫めも全ては納れられなかったようで、それ以降も、後宮の女性たちを亡き皇帝の園陵に配置することは継続して行われた。たとえば、元帝の次の成帝に仕えた班婕妤もそうした女性の一人であったし『漢書』卷九十七下・外戚伝下）、『続漢書』礼儀志下の注に引く『皇覽』も、『漢家の葬』について「後宮の貴幸なる者を以て皆園陵を守らしむ」と述べている。

陵墓に仕える女性といえ、たとえば白居易の新樂府「陵園妾」（『白氏文集』卷四・〇一六一）にも詠じられていて、古来ある聞き慣れた物語のようにも思える。しかし、このような慣習は太古の昔から行われていたわけではなかった。その根本にある靈魂觀の変遷について、曾布川寛氏の一連の論考に拠りながら、本稿との関わりにおいて私なりに把握したところを述べてみれば次のとおりである。そもそも儒教では、『礼記』郊特牲篇に「魂氣は天に歸し、形魄は地に歸す」と言うように、人はその死後、肉体は地中に、靈魂は天上へ歸っていくと考える。そして、戦国楚の文化圏では、その靈魂の赴く先は、不死の聖域崑崙山と考えられていたらしい。このような考え方によれば、大切なのは魂を祭る廟であって、死者の肉体を葬った墓はそれほど重要視するには当たらないはずだ。ところが、こうした靈魂觀を刷新したのが秦の始皇帝である。彼は生前から莫大な資財と人力を投じて広大な陵墓を築き、死んだ後も、現世を余すところなく再現したその地下世界に君臨し続けようとした。すなわち、陵墓はここにおいて皇帝の靈魂の住処となったのである。そして、従来は宗廟の中に設けられていた寝（生前の衣冠などを納める所）が、靈魂に奉仕するための建物として、陵墓の側に移されることとなった。これを陵寢制度というが、秦始皇陵は、実にこの制度に基づいて計画されたものであったらしい。

さて、漢の皇帝たちも、陵寢制度を踏襲して盛大に陵墓を造営したが、先に見た女性たちは、この制度が持つ考

え方に基づいて園陵に送り込まれたのだと言えるだろう。皇帝の靈魂は死後もその陵墓の中で生き続ける。だからこそ、彼女たちはその陵墓の側で、生前と同じように皇帝に仕えることが求められたのである。後漢末の蔡靈は、その『独断』巻下において陵寢制度の沿革と実態について述べているが、園陵に仕える諸官人の職務内容として、たとえば「宮人は鼓漏（時計）に随ひて被枕を理へ、盥水を具へ、蔽具（裝飾品）を陳ぶ」といった具合に記している。宮人とは、省中の官婢のことであつて、皇帝に仕える掖庭中の女官を言つのではないが（『漢書』外戚伝下・趙皇后の顔師古注）、もと後宮にいた女性たちに対しても、おそらくは先の宮人たちと同じように、極めて現世的な仕事が多量に定められていたのではないだろうか。

ところで、前漢王朝の後妃には、たとえば武帝の王夫人や李夫人のように歌舞音曲に秀でた女性が多かつた。<sup>(8)</sup>また、前漢中期以降の後宮における俗樂の盛行については、『漢書』卷二十一・礼樂志にも、「内には掖庭の材人有り、外には上林の樂府有り、皆鄭声を以て朝廷に施す」と概観されているとおりである。「上林の樂府」とは武帝によって設けられたという俗樂専門の音樂機關であるが、「掖庭の材人」による俗樂演奏は、この専門機關にも並ぶほどの隆盛ぶりだつたというのである。そうすると、後宮の女性たちの中には、園陵に配せられて後も、その得意とする歌舞によつて今は亡き皇帝に仕える者もいたかもしれない。先にも示したとおり、陵寢制度では死後の世界を現世と地続きで捉える傾向が強いので、亡き人の眠る陵墓の側で、その魂を慰めるために世俗的な歌舞が演じられたとしても何ら不思議ではないだろう。

もと後宮の女性によるものではないが、園陵における俗樂の演奏は確かに行われている。たとえば、『文選』卷十、西晋の潘岳「西征賦」は、前漢の宣帝（在位前七四—前四九）が造営した奉明園や思后園について、

（宣帝は）敬養を事とするを獲されば、盡く隆を園陵に加ふ。兆（墓域）は惟れ奉明、邑は千人と號す。諸を故老に訊ふに、帝詢より造まると。王母の非命を隱み、聲樂を縦にして以て神を娛しましむ。舊典に率ふ靡しと雖ども、亦た過ちを觀て仁を知る。

と詠じているが、その李善注に引く潘岳「園中記」の中に、

宣帝の父を悼皇考と曰ひ、母を悼夫人と曰ひ、墓を奉明園と曰ふ。后を思后と曰ひ、倡優雜伎千人を以て思后



園に樂す。今の所謂千人郷なる者は是れなり。

との説明が見える。思后と追号された人物は、武帝の衛皇后で、宣帝の曾祖母に当たるが、潘岳によると、宣帝は無念の死を遂げたその曾祖母を悼んで、千人からなる楽人芸人たちをその園に送り、思う存分に声楽曲を演奏させて彼女の靈魂を楽しませたのだという。ちなみに、衛皇后もまた、もとは平陽公主（武帝の姉）に仕える歌姫であつた。

なお、衛皇后の陵墓について、『漢書』外戚伝上には、「宣帝立ちて、乃ち衛后を改葬し、追諡して思后と曰ふ。園邑三百家を置き、長丞（三）焉（三）に周衛奉守す」と記すのみであつて、宣帝が歌舞を以て死者の靈魂を慰めようとしたことには全く触れていない。その顔師古注に「倡優雜技千人を以て其の園に樂す。故に千人聚と号す。其の地は今長安城内金城坊の西北の隅、是なり」とあることによつて初めてそれと知られるのだが、『漢書』本文におけるこの事実の黙殺はどういうわけだろうか。思つに、班固はあくまでも儒教思想の本流に基づいて漢王室の歴史を書き記そうとした人物であるから、伝統的な宗廟制度には沿わず、しかも王朝の内外を弛緩させた俗樂を称揚しかねないこの種の行為には、いくらそれが皇帝の発意によるものであつたとしても、内心肯定し難いものを感じていたのかも知れない。

だが、班固のそうした姿勢とは裏腹に、このようなことは、実際には相当広く行われていたのではないだろうか。その一端として、先にも挙げた『関中記』は、惠帝陵について「關東の倡優樂人五千戸を徙して、以て陵邑を爲す。善く嘲戲を爲す。故に俗に女嘲陵と稱するなり」（宋の宋敏求『長安志』卷十三に引く）という記述も残している。こうしたことから想像するに、陵墓に仕えた後宮の女性たちの周辺には、おそらく艶っぽい俗樂の調べが日常的に流れていたことだろう。先に示した貢禹の進言の中で、「放出園陵之女」と「罷倡樂、絶鄭声」とが隣接して述べられていたことは、両者のつながりの深さを暗示しているようにも思われる。

さて、こうした俗樂と深く関わっていたらしいのが五言詩型である。もともと軽俗な調べを持つ五言歌謡は、前漢後期、上層階級に蔓延した俗樂との適合によつて、宮中から広く宮廷外へ流布していったというのは、先にも挙げた岡村氏の推論だが、私もこの見方を支持する。また、五言詩の祖たる「古詩」の中には、たとえば「今日良宴

会」「西北有高楼」「東城高且長」のように、実際に俗楽の演奏に言及する詩篇も少なくない。このようなことから考えるに、五言の詩歌が俗楽との間に密接な交渉を持っていたことは間違いないと見てよいだろう。とすると、軽艶なる俗楽の調べが奏でられる園陵に、宛転たる五言歌謡の歌声が相共に流れていた可能性は十分考えられる。先の潘岳「西征賦」にいう衛皇后の魂を慰めるための「声楽」には、もしかしたら五言詩型の歌謡が少なからず含まれていたかもしれない。また、園陵という場と五言詩型との関係性を示唆するものとして、前漢宣帝期成立の鏡歌「上陵」を挙げることもできよう。「上陵」とは皇帝が行う陵墓での祭礼をいうが、こう題された歌の歌辞は、かなりの部分を五言の句型が支配している。ちなみに、宣帝といえは、かの思后園で声楽を演奏させて衛皇后の魂を慰めた皇帝である。その治世年間には、ちょうど宮廷の内外に俗楽が流行しつつあった時期であり、同時に、後宮の女性たちが園陵に置かれるということが慣習となりつつあった時期でもあった。この他、成立年代は不明ながら、「古詩紀」巻七（漢七）、艷歌「今日樂上樂」の注に「又た之を妍歌と謂ふ」として引く次のような歌辞もある。

青青陵中草

傾葉晞朝日

青青たる陵中の草、葉を傾けて朝日に晞く。

陽春布惠澤

枝葉可攬結

陽春 惠澤を布き、枝葉 攬結す可し。

草木爲恩感

況人含氣血

草木すら恩の爲に感ず、況んや人の氣血を含むをや。

陵墓に生い茂る草から歌い起こすこの詩歌も、このようにくつきりとした五言詩型を為しており、このリズムが園陵という場に馴染むものであったらしいことを窺わせる。

そして、更に一步踏み込んで推論するならば、この歌辞は、あるいは園陵に配せられた後宮の女性たちによって歌われた可能性もある。というのは、「古詩紀」注にも言うとおり、妍歌とは艷歌の別称であるが、「艷」とは楚歌をいい、楚の民謡といえは、前述のごとく、前漢の宮廷内部に深く根を張り、五言詩型の基ともなった、元はといえば後宮の女性たちの間で流行した歌だったからである。この「青青陵中草」という歌辞は、その出自が未詳ではあるのだが、それを乗せていた妍歌というものの素性をこのように捉えると、陵墓に仕える後宮出身の女性たちとの間に何らかの接点を持っていたように思われてならない。それに、この歌辞の第一句「青青陵中草」は、前章でも触れた「青青河畔草」詩のそれに酷似している。「青青河畔草」は、男女の離別をテーマとする、「古詩」の中で

も最も原初的な部類に属すると思われる詩篇であつて、私はその成立の場を前漢の後宮周辺と推測したのだったが、それと同様の措辞を共有するということは、この「青青陵中草」もまた、かの原初的「古詩」誕生の場に連なるようなところで作られ、歌われた可能性が高いと見てよいのではないだろうか。これはあくまでも一つの仮説に過ぎないが、たとえば後宮で「古詩」に親しんでいた女性たちが、園陵に移されて後、艶麗なる俗楽の流れの中で、その一句をもじつた五言歌辞「青青陵中草」を作り出したとも考え得る。ただし、この仮説は、五言歌謡一般が「古詩」に先んじて園陵で行われていた可能性を否定するものではない。「古詩」が園陵という場へ流れ込み、それに何らかの影響を受けてできた五言歌辞もあるだろうと推測しているのである。なお、男女の離別を詠ずる詩歌は、先学の指摘する<sup>(13)</sup>とおり、招魂や鎮魂の歌との間に深い親和性を持つ。そうしてみると、死者の靈魂に接する園陵においては、現世での恋情を詠ずる原初的「古詩」そのものが詠じられていた可能性もあるし、それをアレンジした辞句を含む五言歌謡も相当数作られていたのではないかと想像される。

三

前章で示した推論によるならば、男女の離別をテーマとする原初的「古詩」は、園陵に送られた後宮の女性たちを仲立ちとして死後の世界と出逢つた。とはいえ、それによつて「古詩」の行われる場が全面的に園陵に移つたわけではなく、後宮の女性たちを交えた王朝主催の遊宴などにおいても、もちろんそれらは依然として詠じられていたことだろう。なお、既に述べたとおり、この段階での「古詩」には未だ死というものへの明確な意識は認められない。「古詩」における陵墓への言及は、数ある詩篇の中でも比較的新しいと目される部類に至つて始めて現れる。それでは、「古詩」が死後の世界を詠じるようになったのはどのような経緯によるのか。そして、その経緯は園陵という場とどのように関わっているのだろうか。

五言詩型は俗楽との関係が深いということ、その俗楽が園陵においても演奏されていたということは既に述べたとおりだが、今ここで、前漢後期における俗楽、とりわけ女楽の広がり方を『漢書』に拠つて再確認しておきたい。

まず、先にも挙げた貢禹伝には、元帝に対する貢禹の奏上の中に、宮中の奢侈な風潮の影響として「女を取ること皆大いに度を過ぎ、諸侯の妻妾或いは数百人に至り、豪富吏民の歌者を畜ふるは数十人に至る」と述べられていた。続く成帝期について見れば、卷二十一・礼楽志に、

是の時（成帝期）、鄭聲尤も甚だし。黃門の名倡 丙彊・景武の屬、世に富顯たり。貴戚五侯 定陵（淳于長）・富平（張放）ら外戚の家、淫侈は度を過ぎ、人主と女樂を争ふに至る。

と記されているとおり、この時期、俗樂の流行はピークに達し、外戚の中には君主と女樂を奪い合う者さえ現れたという。このような趨勢を裏付ける資料として、卷十・成帝紀に載せる永始四年（前一三）の詔には、

方今の世俗は奢侈極まり罔く、厭き足ること有る靡し。公卿・列侯・親屬・近臣、……或いは乃ち奢侈逸豫にして、務めて第宅を廣め、園池を治め、多く奴婢を畜へ、綺縠を被服し、鐘鼓を設け、女樂を備へ、車服・嫁娶・葬理は制を過ぐ。吏民は慕效して、濇く以て俗を成す。而して百姓の儉節、家給し人足るを欲望するは、豈に難からざらんや。

とあつて、女樂を備えるような奢侈な暮らしが、上級支配者層から実務官吏や庶民に及ぶまで広がっていたことを伝えている。その具体例として、たとえば卷八十一・張禹伝には次のような記事が見える。

禹は性音聲を習知し、内は奢淫にして、身は大第に居り、後堂にて絲竹莞弦を理つ。……崇（張禹の弟子である戴崇）は禹を候ぬる毎に、常に師は宜しく酒を置き樂を設けて弟子と相娛しむべしと責む。禹は崇に將めて後堂に入りて飲食せしめ、婦女相對し、優人の莞弦は鏘鏘として樂しみを極め、昏夜となりて乃ち罷む。

張禹は元帝・成帝期の人で、經學に通じ、丞相まで務めた士人だが、弟子ともども、このような宴を楽しんでゐる。同じ頃に奢侈を極めた史丹という人物も、その本伝（卷八十二）に「僮奴は百を以て数へ、後房の妻妾は数十人、内は奢淫にして、飲酒を好み、滋味声色の樂しみを極む」と記されており、その身辺になまめかしい女樂の響きが流れていたらしいことが窺われる。こうした情況は、前漢末の外戚、王氏一族においても全く同様に認められ、卷九十八・元后伝には、その弟たちの「後庭の姬妾は各数十人、僮奴は千百を以て数へ、鐘磬を羅ね、鄭女を舞はしめ、倡優を作さしめ、狗馬は馳逐す」といった奢侈な暮らしぶりや、成帝の崩御後まもなくその「掖庭の女樂」を

奪い取つて酒宴を設けた王根らの所業などが記されている。以上を要するに、前漢後期、貴顕富豪たちの生活には艶っぽい音色の俗楽が日常的に流れていたと言つてよいだろう。

ところで、前漢王朝は陵墓の近くに陵邑を形成し、様々な階層の人々をそこへ移住させたが、その中には豪奢な暮らしを送る富豪たちも含まれていた。陵邑が貴顕たちの居住区となつたことについては、班固の「西都賦」(『文選』卷一)に文学的描写が見えるほか、『漢書』卷二十八下・地理志下にも次のような記述が見えている。

漢興りて都を長安に立て、齊の諸田、楚の昭・屈・景、及び諸功臣の家を長陵(高祖の陵墓)に徙す。後に世世、吏の二千石・高訾の富人、及び豪桀・并兼の家を諸陵に徙す。……又た郡國輻湊して、浮食する者多く、民は本を去りて末に就き、列侯貴人、車服は上に僭なぞりへ、衆庶放效して、相及ばざるを羞ぢ、嫁娶には尤も侈靡を崇び、死を送るにも度を過ぐ。

これによると、皇帝の陵墓のすぐ側では貴顕富豪たちの奢侈な生活が繰り広げられていたらしい。ここに示されたような冠婚葬祭で俗楽が演奏されたことは想像に難くないが、そうでない日常生活においても、艶っぽい歌舞音曲の楽しみは常時そこに展開されていたことだろう。そうした場で行われる声楽曲の歌辞に、眼前に望まれる陵墓の様子が歌い込まれたとしても何ら不思議はない。そうした歌辞の一部が、後にたとえば「青青陵上柏」詩の冒頭に嵌め込まれたのではないか。そう想像することはあながち荒唐無稽でもないように思う。

なお、以上に述べてきたことは、「上林楽府」が廃止された哀帝の綏和二年(前七年)に向かつて、その楽団組織の規模が徐々に縮小されていった時期に当たっているが、宮廷外において俗楽がかくも隆盛を極めていたのであれば、楽府から放出された楽人たちも路頭に迷うことはなく、富豪たちの私設楽団に新たな仕事を得ることができただろう。そして、こうした趨勢は後漢時代に入っても全く衰えることがなく、皇帝から外戚・士人・宦官に至るまで、俗楽が各界の人々の私的生活を艶やかに彩つたことは先学の夙に指摘しているとおりである。

一方、前章で触れた陵寢制度も、俗楽の流行とほぼ時を同じくして、王朝内からその外へと広まっていったようである。このことは、今に残る幾多の漢墓が雄弁に物語つているところだが、文献資料を挙げるならば、たとえば元帝期の張臨は、代々侯に封ぜられた貴顕の家柄であるが、その死に際しては、薄葬を命じて墳を起こさせなかつ

たというし（『漢書』卷五十九・張湯伝）、また、王莽期の学者、龔勝も「俗に随ひて吾が冢を動かす、柏を植ゑ、祠堂を作ること勿かれ」と遺言している（同卷七十二・兩龔伝）。こつしたことがわざわざ記されているところに、当時における厚葬の盛行を窺い知ることができよう。言うまでもなく厚葬とは、死者の靈魂は墓室の中で生き続けるという発想に由来するものであって、それは陵寢制度のいわば庶民版である。厚葬については、後漢の順帝——桓帝期（一一五—一六七）頃の王符『潜夫論』浮侈篇（『後漢書』卷四十九・王符伝に引く）にも、次のような批判的記述が見えている。

今 京師の貴戚、郡縣の豪家、（親の）生けるときには養を極めざるに、死して乃ち喪を崇んにす。或いは金纒玉匣、櫛椀、楸、多く珍寶・偶人・車馬を埋め、大家を造起し、廣く松柏を種ゑ、廬舎・祠堂には務めて華侈を崇んにするに至る。

ところで、先にも述べたとおり、前漢王朝の陵園では俗樂が演奏されていた。とすると、宮廷外に波及した厚葬も俗樂を伴つたと見るのが自然であろう。このことに關して、佐原康夫氏は、後漢の祠堂で行われる墓祭は死者が仙界で受ける歓待の再演であり、祠堂に刻み付けられた画像はその仙界での宴樂を写し取つたものだと、そこに描かれた樂舞や百戲などの芸能も、祭祀の場で実際に上演されていた可能性が高いと推測しておられるが、私も氏の所論を支持したい。前漢後期以来の俗樂の隆盛ぶり、貴顕富豪たちにおける厚葬への執着、宮廷文化を摸倣し、豪奢を競い合う社会風潮などを考え合わせると、墓祭において俗樂が演奏されなかつたと考える方が不自然なくらいである。

さて、今述べた推論がもし妥当であるならば、前漢後期から後漢時代にかけて、死者を祭る場と現世での宴席との双方で俗樂が演奏されていたことになる。既に繰り返し述べてきたように、この時代の人々は、死後の世界をほとんど現世と地続きのように捉えていた。したがって、死者の靈魂を迎えて歓待する場が、この世の宴と同様の雰囲気を持つていたとしても驚くには当たらない。そして、ここであらためて想起したいのが五言の詩歌である。前述のとおり、五言詩型は俗樂との親和性が高く、おそらくは上層階級の催す宴席などで詠じられてきたと推測されるのであつたが、もしそつだとすると、死者の眠る陵墓の側で、哀怨を帯びた俗樂の調べとともに、現世

的な五言の詩歌が詠じられることもあったと考え得る。また逆に、現世的宴席の中に、死後の世界に触れる五言歌謡の辞句が流入するということも当然あっただろう。そして、そうした宴席に参加する文人たちの中には、そこに交錯する死後の世界と現世との双方を眺めながら、その酒宴を盛り上げるべく新詩を作る者も現れたのではないか。たとえば泉下の人々に思いを馳せながら美酒美服を勧める「驅車上東門」詩などは、こうした経緯の末に誕生したものではないかと私は想像する。

結 び

以上、「古詩」と死後の世界との接点を探りながら、死に言及する「古詩」の成立経緯について考察してきたが、このことは、俗楽というものを視野の中心に置いて次のようにまとめなおすこともできる。すなわち、原初的「古詩」は、男女の離別の情を主要テーマとし、それは宴席に悲哀の情感を提供する文芸として行われたと推測されるが、その宴席という場に常時流れていたのが俗楽である。「古詩」は常に俗楽とともにあったと言えるが、この俗楽は前漢後期以降、宴席のみならず、死者の眠る陵墓の側でも演奏されるようになっていった。当時の人々は、地下に広がる死後の世界を限りなく現世に近いものと捉え、死者の靈魂を、生ける者に対するのとほとんど変わりないもてなし方で慰めたのである。前漢以来、宴の場を舞台に詠じられてきた「古詩」は、おそらくはこの時、俗楽を媒介として死後の世界と交わったのではないか。「古詩」の死への言及は、實にここに由来すると私は考える。

注

(1) 松家裕子氏「叙情的五言詩の成立について」、『中国文学報』第四十二冊、一九九〇年十月。

(2) 拙論「陸機擬する所の古詩について」、『中国文学論集』第二十八号、一九九九年、「古詩」源流初探——第一古詩群の成立——、『中国中世文学研究』第四十三号、二〇〇三年、「古詩誕生の場」、『中国中世文学研究』第四十五・

四十六合併号、二〇〇四年)などを参照されたい。

- (3) 本稿で取り上げた「古詩」の中、この「蘭若生春陽」詩だけは『文選』巻二十九「古詩」十九首には含まれず、『玉台新詠』巻一に枚乗「雜詩」として収められている。
- (4) 岡村繁氏「五言詩の文学的定着の過程」(『九州中国学会報』第十七巻、一九七一年)。
- (5) 曾布川寛氏「中国美術の図像と様式 研究篇」(中央公論美術出版、二〇〇六年) 古代美術の図像学的研究、及び同氏による『世界美術全集・東洋編2(秦・漢)』(小学館、一九九八年)の解説。
- (6) 曾布川氏「崑崙山と昇仙図」(同氏前掲書所収。初出は『東方学報』第五十一冊、一九七九年)を参照。
- (7) 曾布川氏「秦始皇陵と兵馬俑に関する試論」(同氏前掲書所収。初出は『東方学報』第五十八冊、一九八六年)を参照。
- (8) このことは、前掲の拙論「古詩誕生の場」で既に指摘した。
- (9) 『関中記』については、劉慶柱氏による詳細な輯注(『三秦記輯注・関中記輯注』三秦出版社、二〇〇六年)がある。
- (10) 岡村氏前掲論文。
- (11) 『藝文類聚』巻八十一、及び『太平御覧』巻九九四には「古詩」として引く。末尾の二句は『御覧』により補った。
- (12) 増田清秀氏「楽府の歴史的研究」(創文社、一九七五年)九十三-九十六頁を参照。
- (13) 西岡弘氏「中国古代の葬礼と文学(改訂版)」(汲古書院、二〇〇二年。初版は一九七〇年、三光社出版より刊行)五三二-五三三頁に、挽歌と相聞の歌とは境目が曖昧だと指摘する折口信夫の論「歌の発生及びその万葉集における展開」(『折口信夫全集』第九巻所収)に抛りながら、男女の恋愛を詠ずる詩歌は挽歌から転移したものだとする推論が提示されている。
- (14) 小西昇氏「後漢に於ける楽府詩流行の状況について」(『文学研究』第六〇輯、一九六一年)。
- (15) 佐原康夫氏「漢代祠堂画像考」(『東方学報』第六十三冊、一九九一年)。